

# 進化経済学会ニュースレター No. 19

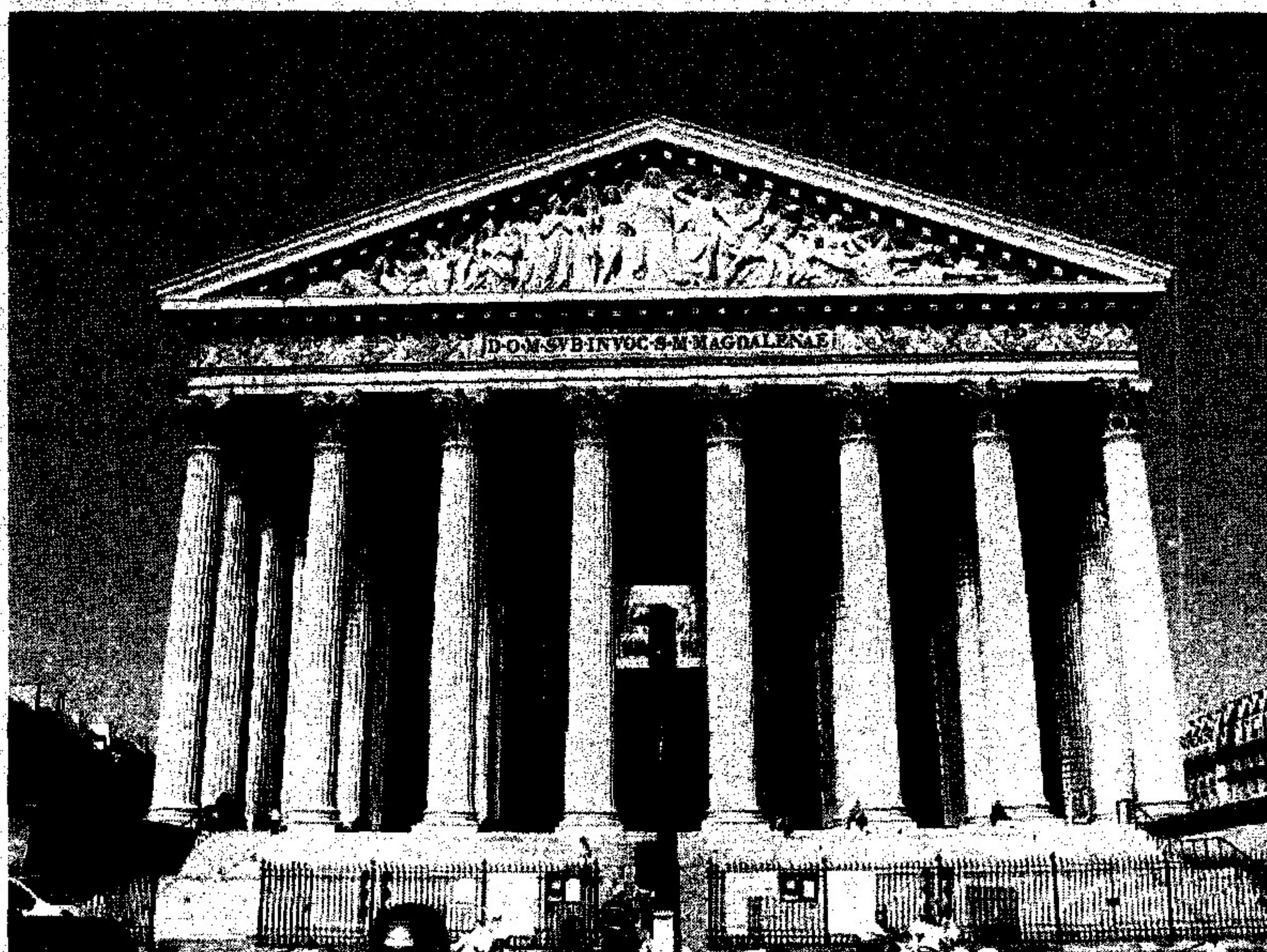
November 2005

進化経済学会事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19

国際文献印刷社内 進化経済学会事務局

T:03-5389-6493 E:evoeco-post@bunken.co.jp



\* \* \* \* 記事 \* \* \* \*

進化経済学会第 10 回（北海道大学）オータムコンファレンス・サマリー

書評・EIER 書評会

進化経済学会第 111 期第 6 回理事会報告

2005 年度進化経済学会役員選挙報告・当選者名簿

平成 16 年度決算報告

2005 年度上期部会活動報告

名簿訂正／学会事務局から

第 10 回進化経済学会北海道大会の案内

\* \* \* \* \* \* \* \* \*

卷

\*\*\*\*\*

## 第10回進化経済学会北海道大会オータムコンファレンス・サマリー

\*\*\*\*\*

西部忠（大会委員長）、江頭進（副委員長）、吉地望（事務局長）

第10回進化経済学会北海道大会・オータムコンファレンスは、2005年9月10日(土)の10:00-17:15に北海道大学理学部5号館大講堂で、「進化経済学の再定義—一学の分岐と融合」を共通テーマとして行われた。とかく遠方と思われがちな札幌での開催にもかかわらず、約50名が参加する盛況な大会となったことに対して、主催者として感謝する次第である。

先述のような共通テーマを設定したのは、学会設立10周年は「進化経済学とは何か？」という学会発足時の問い合わせ改めて参考するよい機会であり、そうすることが今後の学会の発展に寄与するはずだと考えたからだ。本コンファレンスでは、さらに以下の三つの新企画を立案し実行した。  
(1)若手を中心とする2日間のサマースクールの開催、(2)「進化経済学の再定義」に関するアンケート調査の実施と結果報告、(3)コンファレンスの二部構成化による拡充。以下、(1)-(3)を順番に説明する。

### (1)進化経済学サマースクール

若手研究者を中心とした進化経済学サマースクールは、本年度の進化経済学会オータムコンファレンスの直前の9月8,9日の両日、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟（通称W棟）で開催された。このサマースクールでは、進化経済学の全体像を理解してもらうために、通常の学会のよう

にセッションの分割をせず全報告を全員で聴くという形をとった。また、社会科学系の学会でよく見られる各報告の終了後、質疑応答を行うのではなく、報告の途中にも割り込んで質問をすることができるようにもした。サマースクール自体は自由参加としたので、学会員以外の参加も多数見られた。

二日間に全部で23の報告が行われた。初日は、主に進化ゲーム理論やシミュレーションを用いた研究が報告され、最後には慶應大学の井庭研究室が開発した Platbox の実習も行われた。二日目は、企業進化や地域通貨の実証研究、経済学史、思想研究などが報告され、また塩沢由典会長の報告を中心に、現在進行中である『進化経済学ハンドブック』の編集過程で浮かび上がってきた進化経済学の定義にかんする議論を1~2時間半程度の時間をとって行った。サマースクールの報告では、進化経済学で議論されているほぼすべての分野が網羅されており、全員がそれを聴き、ブレインストーミングを行うという当初の目的は達成できたと思われる。

自分の専門以外の議論を聞くことによって、いわゆる「耳学問」の効果を狙った今回のサマースクールであるが、全体として社会科学系の研究者は、報告の途中にも議論をおこなう形式に不慣れであったため多少のとまどいも見られた。だが、30~40名

程度の参加者を得て、参加者間の交流も進み、全体としては成功であったと言える。

サマースクール全体を通してみて、シミュレーション分析が多く、実証研究が少ないという日本の進化経済学の特徴が改めて浮き彫りになった。23報告中、シミュレーションにかかわるものが12報告であったのに対して実証研究はわずかに2報告であった。これは特に理系からの参入が多いいためと考えられるが、進化経済学が現実をより適切な方法で記述することを目的の一つとして掲げている以上、実証研究の不足は深刻な問題であろう。今後、実証研究とそれに接合できる理論研究の質、数双方の向上が日本の進化経済学の発展のために必要であると思われる。

若手の研究者を進化経済学に対する関心を刺激し、異分野間の協力体制を構築するためには、今回のような試みは重要であろう。サマースクール自体は、今後も形式にこだわらず知的関心を刺激するような形で継続すべきである。有機的組織の進化には、安定と発展を両立させるためのメカニズムが内包されていなければならない。若手中心のサマースクールは、多様化と発展性のための重要な機能を果たすと期待される。

(文責：江頭進)

## (2) 「進化経済学の再定義」についてのアンケート調査

学会設立から10年の節目ということで「進化経済学の再定義」というテーマが採択された。オータムコンファレンスや本大会の報告者・参加者がこのテーマについて議論する前提として、会員自身が「進化経済学」をどのように定義しているかを知る

ことは重要であると考え、WEB上、郵送、持参という三通りの集計方法でアンケートを実施した。

WEB上の回答が90%以上を占め、33人の会員からの回答を得た。総会員数からすれば10%未満にすぎないが、寄せられた回答の中には今後の学会のための有益な情報が含まれていると考えている。

「進化経済学における問題関心に当たるキーワードは？」という問い合わせに対する回答として、「イノベーションと模倣」が第一位、「技術革新」が第二位であった。ここでは、遺伝、変異、選択のような生物進化論の主要キーワードがほとんど選ばれていない。この結果に対応するのか、「進化経済学の上で参考すべきは誰の議論ですか？」という問い合わせにも、「シュンペーターの『経済発展の理論』」が第一位、「ネルソン・ウィンターの『経済変化の進化理論』」が第三位に入っている。ところが、「進化経済学が長所を持っている研究分野は？」という問い合わせには「学際的研究」という回答が全体の約27%を占めているのである。自然科学との学際や学融合は期待されているものの、実際にはそれほど進んでいないという現状を表しているように思える。また、進化経済学における問題関心のもうひとつ大きなグループは「制度、慣習・規範」である。「制度分析」を進化経済学の長所として挙げる比率は11%を上回っている。

「あなたが考える社会・経済進化概念に一番近いものは？」の回答第一位は「秩序・制度の生成・変化」であり、これは全体の32.3%を占めている。結局、本アンケート結果では、技術進歩と制度の両概念が重視されている。

回収率が 10%未満と低いため、このアンケート結果から学会全体の傾向を読み取ることは早計であろうが、それでも興味深い結果ではなかろうか。詳しいアンケート結果は、以下の URL からダウンロードできる。是非御一読いただき、本大会での討論に生かしていただければ幸いである。

[http://jea.ega-s.otaru-uc.ac.jp/evoeco\\_hokkaido/hokkaidobranch/evoecoenq.pdf](http://jea.ega-s.otaru-uc.ac.jp/evoeco_hokkaido/hokkaidobranch/evoecoenq.pdf)

(文責：吉地望)

### (3) パネルディスカッションならびに最終討論

例年のオータムコンファレンスは午後の部だけだが、今年は、午前の部を経済学、午後の部を自然科学とする二部構成をとった。進化経済学が「進化」や「複雑性」という理科系分野が対象とする問題に関わる以上、その再定義に際しても、他の社会科学や生物学、複雑系科学などの自然科学の視点をも含んだ文理融合学問としての性質を自覚する必要があろう。そのため、午前に経済学関係 3 人、午後に理系関係 3 人、計 6 人のパネラーをお招きしただけでなく、コンファレンスの最後に 6 人全部が一堂に会して意見交換をする場を敢えて設けることにした。このため、午前のパネラーには一日おつき合いいただいたわけで、この点大変感謝している。また、パネラー各氏から事前にアブストラクトを提出していただき、サイトで事前公開し、また、それをまとめて小冊子にし、当日の参加者に配った。なお、コンファレンスのプログラムやアブストラクトはここで見ることができる。

[http://jea.ega-s.otaru-uc.ac.jp/evoeco\\_hokkaido/hokkaidobranch/autumn.html](http://jea.ega-s.otaru-uc.ac.jp/evoeco_hokkaido/hokkaidobranch/autumn.html)

以下、午前の部と午後の部の内容を簡単に紹介したい。

午前の部では、西部忠が司会を行い、経済学や経済学史の視点から進化経済学の再定義について議論した。

初めに金子勝氏が「逆システム学の実践的方法論的含意」と題する報告を行った。ヒトゲノム解読により DNA のうち蛋白情報を持つのはわずかに 2 % にすぎず、残りの 98 % が調節制御に関わっており、多数の遺伝子と蛋白質が複雑な多重フィードバックを形成している。経済も「制度の束」からなる多重フィードバックシステムであり、人間の実践的介入を通じて帰納的にしかできない。よって、要素還元主義と演繹に基づく制度設計は失敗する。「逆システム学」は、民主主義と多様性の価値を環境変化に対する適応力だと主張した。

富森虔児氏は「進化経済学の再検討－生物経済学の薦め」と題する報告を行った。経済とは有機的生命現象であるから、「進化経済学」は進化論的生物学との学融合をめざす「生物経済学」になるはずであり、その際、ネオ・ダーウィニズムを鵜呑みにせず、構造主義進化論、自己組織化論、共生説、構成的生物学などから学ぶべきである。そうすれば、経済主体が多様性と状況依存的多義性、自主性を備え、柔軟な搖らぎを持ちつつ安定していること、経済システムも競争、補完、創出などの相互作用系であることが理解されたとした。

最後に、塩野谷祐一氏が「進化経済学の再定義」と題し、経済学史の視点からシェンペーターの「進化経済学」について論じた。主流派経済学（古典派、新古典派）は啓蒙主義に基づくが、進化経済学は反啓蒙

主義を背景に持つ。大陸哲学の実現者であるシュンペーターは、自らの体系を「経済静学・経済動学・経済社会学」の三層からなると考えた。ゆえに、彼の進化経済学とは、技術革新、市場競争、産業組織の動態を研究する単なる「経済動学」ではなく、経済とその他の社会領域との相互交渉を通じて社会全体が内生的に変化する過程を捉える「経済社会学」（総合社会科学的な）であると述べた。

その後の意見交換では、現代生物学を経済学に導入する際にいかなる問題が生じるか、経済の現実と実態を観察しつつ介入する試行錯誤を通じてシステムを帰納的に理解することが重要だ、進化経済学は総合社会科学さらには文理学融合であるべきだが、理想通りにはいかないなどが議論された。パネラー三人で一致していたのは、進化経済学が演繹的論理、要素還元主義ないし啓蒙主義への批判を方法論的基礎としているという点である。

午後の部では、塩沢由典氏が司会を行い、進化経済学を特徴づける「進化」や「複雑性」をどう把握するか、理系研究者三人に報告してもらい、次いで、三者の討論とフロアからの質疑に対する応答が行われた。

橋本敬氏は「進化経済学と進化言語学」と題して、自らが研究している進化言語学とのアナロジーに基づいて、進化経済学を論じた。「遺伝する変異」という生物進化論は言語には適用できないので、「言語能力の進化」と考えるか、進化概念を変更するかのどちらかだが、前者は言語の起源、後者は言語の進化を問うことになる。これら二つが言語進化のダブルループを形成し、そこでは、異なる時空間スケールで働く適

応ダイナミクスが相互作用する複雑性が生じる。これを経済に適用すれば、経済の起源を扱うのが「生物経済学」であり、経済の進化を扱うのが「進化経済学」となるのではないか。

次いで、郡司幸夫氏は「ミクロ・マクロを調停する質料因」について論じた。任意の概念、例えば「砂山」という概念は内包（砂山という性格）と外延（砂粒の集合体という対象）を持つが、内包を外延と混同するとき砂山のパラドクスが生じる。しかし、これを内包・外延の動的双対性と捉え、ミクロ・マクロシステムとしてモデル化すると、両レベルを媒介するものは「質料因（モノ性）」しかない。これを定義域不定な崩壊関数（スケルトン）として定義すると、そのおかげでミクロとマクロの動的双対性は頑健に維持される。

最後に、津田一郎氏は「進化における固形化と変容のダイナミックス—複雑系科学の観点から」と題する報告で、複雑系科学の観点から生物進化の本質を6点（1）機能に関するマクロ情報の固定化の方法、2）生物進化におけるダイナミクスの働き、3）個と集団のダイナミクス、4）脳の進化、5）発生と進化の関係、6）生成の論理）に整理し、人間行動の複雑さを進化的な観点から再考した。特に、脳機能地図境界のダイナミックな変化、遺伝子の他の遺伝子との複合による形態変化、ステップ推論による形式論理的矛盾の解消などが注目される。

これらの報告に対してフロアからいくつか質疑があり、報告者がそれに回答した。

最終討論では、進化概念について議論が及び、生命進化と文化・経済進化の原理は

人間の特異性ゆえに部分的に異なりうるし、心理や脳の進化の解明が重要な課題であることが確認された。また、午前の部の金子・富森報告と午後の部の橋本・津田報告はかなりよく似た問題関心を持っているとはいえ、複雑系における構成的手法と社会科学における帰納主義の違いも問題とされた。進化概念や研究方法について文理双方の研究者がそろって議論することはめったにない貴重な経験であり、進化経済学の再定義にもプラスになったし、その文理学融合的な展開のための第一歩になりえたと考える。

以上の三つの企画そのものではないにしても、その精神—若手の育成、学会の自己反省、他分野との開放的な交流—が来年以降も引き継がれることを期待したい。

コンファレンス後の懇親会はアスペンホテルでとりおこなわれ、45名のご参加をい

ただいた。最初に岡部洋實会員（大会運営副委員長）の挨拶、次に塩沢由典会長の挨拶、その後立食形式で1時間ほどの歓談という流れで進み、途中で恒例となっている吉田雅明会員セレクトの日本酒が振る舞われるなど、楽しい一時があつという間にすぎていった。最後は、西部忠（大会運営委員長）の挨拶で3月の本大会への決意表明がなされ、宴は盛況の中幕を閉じた。

最後になるが、遠方から来ていただいたパネラーや司会の方々、今大会の準備や運営に協力してくれた西部・岡部両ゼミの院生諸君、場所や物品をご提供いただいた21世紀COEプログラム「トポロジー理工学の創成」の事務局ならびに事務員の岡部恵実さんには、この場を借りて感謝の意を表したい。

（文責：西部忠）

\*\*\*\*\*  
**書評 吉田 雅明著「マルチ・エージェント・ベースの経済学」**

『経済思想① 経済学の現在1』 塩沢由典編、日本経済評論社、2004年

**西部 忠著「進化経済学の現在」**

『経済思想② 経済学の現在2』 吉田雅明編、日本経済評論社、2005年

吉井 哲（北海道大学大学院 経済学研究科）  
E-Mail: charisma\_y@hkg.odn.ne.jp

本書評は吉田 雅明著「マルチ・エージェント・ベースの経済学」ならびに西部 忠著「進化経済学の現在」の二論文を扱うため、各論文内容を詳述できないことを始めに断つておきたい。西部論文は「進化・進化経済学とは何か」、「進化経済学(会)の存在規範」などの広いトピックを、科学哲学を踏まえながら分かりやすく論じている。吉田

論文は新古典派(NC)批判から始め、マルチ・エージェント・ベースのシミュレーション(MAS)を経済学(特にケインズモデル)に適用する試み(MAE)がなされており、またそれを用いた経済学史研究の新たな方向性(学説史認定率)を提示している。両論文は NC との相違を強調する点で類似しているが、西部論文は進化経済学(Evolutionary

Economics: 以下 EE)における哲学的・方法論的基礎付けにその独自性が色濃く表れている印象がある。それに対し吉田論文には、MAE という構造表現方法によって経済思想に影響力を行使しようとする意図が明確に見られる。

### 1. 進化経済学の定義と対象

先のオータムコンファレンス(2005 年 9 月)での議題が「進化経済学の再定義」であったように、進化経済学(会)は「進化経済学とは何か、また、それは何を何によって研究するのか?」(西部, P3)と自ら問い合わせ続けている。この問を考察する際、西部は「『進化経済学とは何ではないのか』という問へ置き換えてみるのがよい。」(西部, P3)とし、端的に言って「新古典派ではないことをアイデンティティとしているのである。」(西部, P3)と述べている。西部、吉田が共に批判の対象としているのは「主体の最適化行動」、「均衡概念」であり、この仮説の棄却が進化経済学にとってのアイデンティティなのであろう。

NC はスミスの「経済人」と「見えざる手」というメタファーを「最適化主体」と「均衡」という洗練された概念へと発展させた。そして「市場経済の合理性はいかに達成されるか」という問題に対し、厳密な論証を与えたゆえ、主流の地位を占めていると西部は述べる。しかしどもが意図していたのは「技能・熟練・判断力の向上による労働生産力の発展」という動態的効率性が問題なのである。NC はその問題を「希少資源配分上の最適性」に置換したため、達成すべきものが静態的効率性となっている。市場経済が促進するのは、所与の資源の最適

配分よりもむしろ技術革新・技術進歩を通じた生産性の向上であり、つまり動態的効率性なのである。ゆえに静態的効率性概念は「市場を認識する際の障害」でさえあると西部は述べている。

こうした NC の中心命題批判のみではなく、EE は先の二つの仮説が非現実的な単純化であることを批判する。NC の経済主体は価格をシグナルとして受容し、最適化問題の解を計算することで、自らの消費・生産計画を決定しているとされている。しかし、この最適状態は、「経済主体による情報収集・認知能力、最適解の計算能力、経済活動の実行能力に関する多くの暗黙的過程のもとではじめて成立するもの」(西部, P5)であり、非現実的なのである。さらに進化や複雑性を排除するという理論的意味を担っており、原理的に承認しがたいものなのである。吉田のモデリングにおいて経済主体は大局的な情報を入手せず、ローカルな情報のみを入手し、また満足化原理を導入することで比較的簡単な定型化行動のみを行う主体と設定されている。このように EE では人間主体の「諸能力が限定的でしかない」と認識し、それを理論的な前提とする。」(西部, P5)のである。

また NC は経済社会モデル構築の出発点を均衡状態に求める。「不均衡状態もまた無数にありうるので、それを記述してもあくまで現象の記述にとどまり、分析の基準とはなりえない」(吉田, P247)と考えるからである。特に市場経済の特性を、需給を一致させる価格メカニズムととらえており、「市場とは、希少資源の最適配分を実現する均衡価格を導出するための天然のアナログ計算機」(西部, P6)なのである。EE にお

いて市場は「(1) 不均衡価格で恒常に取引される場 (2) 経済行為を有意味なものにし、システムを秩序付けるための社会的制度、同時に貨幣を媒介とした個別取引行為のネットワーク (3) 意思決定の自立性を確保する場、同時に利害対立が裁定される場」などと捉えられ、また設計・構築可能なシステムではなく、自己組織的進化システム・自己生成的秩序であると考えられている。つまり EE における関心は、価格メカニズムでリジッドに結合された効率的なシステム(市場)における「均衡」にあるのではなく、「むしろ、これだけいいかげんなのはどうしてこの経済システムは維持できているのかという驚き」、「それにもかかわらずこの実際に動作している経済システムの振る舞いに働きかける手だてはあるのだろうか」(共に吉田, P269)という所にあるのであろう。

これら上記の点が「NC とは異なる」という進化経済学のアイデンティティであるが、それは対 NC を想定したものであり、EE の独自性という観点で考えるとネガティブなアイデンティティであるかもしれない。NC に替わりうる理論体系を確立することで、ネガティブなアイデンティティが活かされ、「ポジティブなアイデンティティ」が形成されるのである。現在の EE では概念・視点・分析方法は多様であるが、それらの相互連関は必ずしも明確にされておらず、また「それら多くは経済学の他の学派や他の社会科学、自然科学でも用いられているので、いずれかが進化経済学の独自性を表すキーワードであるとも言えない」(西部, P7)のである。しかし、各研究者が「出身分野・学派や研究履歴に依存してかなり個性的」

(西部, P8)であることによるアプローチの多様性のため、EE に普遍的かつ体系的な定義的記述を与えることは不可能である。ゆえに EE がパラダイム転換後の「通常科学」にはなっていないと考えられるかもしれない。しかし西部によると大学ポスト獲得や社会的認知獲得による地位の向上といった「従来の科学概念に基づく考え方では、進化経済学独自の学問様式を十分表現できていない」(西部, P9)のである。

ではいったいどのように考えるべきであろうか。西部は現代科学論における論理実証主義、反証主義のような明確な科学・疑似科学の区分で捉えるのではなく、多様なアプローチの「緩やかな学的連合体(コンソーシアム)」(西部, P9)、「共通の関心領域内でのネットワーク」(西部, P9)、「意図せざる新奇性や創発を生み出す源泉」(西部, P10)と捉える科学観でなければならないと述べている。そしてこのような現代科学観の転換も、EE のポジティブなアイデンティティであると考えている。また「進化する経済を記述する経済学は進化する」(西部, P12)と述べる、「メタ経済学」としての役割もポジティブな側面に入るのであろう。

しかし EE という「共進化する学的ネットワーク」が有意味となるためには、何らかの秩序が必要である。例えば、主体間のミクロ的ネットワークにより、マクロ的な社会が形成され、その相互形成作用がループすると考えるネットワーク理論の観点に立つて考えるならば、クリークはどのように形成されるのか、ブリッジはどのような項目が果たすのか、ポジション、ロールはどのようにになっているかといった何らかの関係性が存在するはずである。このような学際

の関係性を「進化」という「共通キーワード下での集合体」とただ言うのみならず、緩やかに記述することが秩序付ける一つの可能性であるかもしれない。

## 2. 方法論

EE のキー概念である「制度」や「進化」は、NC の哲学的・方法論的基礎である還元主義、実証主義(仮説演繹法)、方法論的個人主義によっては十分理解できない対象である。西部は EE の哲学的基礎として批判的実在論(CR)を挙げている。CR は経験的・現実的という実在層の下に「非現実的」対象の実在層があるとする存在論と、こうした非現実的対象を我々はある時点では直接認識できないとする認識論の立場をとる。ゆえに科学は原始的事象間の恒常的連接に関する普遍法則の発見のみならず、それを支配する構造やメカニズムの固定と解明、つまり説明に向かわなければならないのである。現実の世界は複数の普遍法則が同時に作用している開放系であって、单一の普遍法則を直接観察することは難しい。ゆえに科学における普遍法則は我々が直接に経験できない非現実的次元にあり、例えば相対性理論などは「未知の実在に関するヴィジョンへの人格的コミットメントを通じて『発見』されている」(西部、P39)のである。

近代科学では主にデカルト哲学に基づき、仮説や命題を推論する方法として演繹法と帰納法が使用されている。デカルトは「理性はすべての人々に備わっており、その用い方さえ正しければ、真理に到達することができる。」と考えた。そして「神はこの上なく誠実であるから人をだまさない、ゆえに人間の認識は真とみなされる」と神の存

在を前提とし、「われわれがきわめて明晰に判明に認知するものはすべて真である」という明晰判明の原理を打ち出したのである。

しかし脳科学者である松本 元氏(『愛は脳を活性化する』岩波書店、1996年)によると、脳と遺伝はともに情報を処理する自動アルゴリズム獲得装置と見なすことができる。遺伝情報の基本戦略は、DNA の順序に起きた偶発的変化によって作られる様々な産物が環境との適合性を試され、適合していると認められた DNA の順序配列が生き残るというものである。この戦略は無から有を獲得しようとするもので効率が悪いが、一度獲得されたものは保存され、階層構造化されるのでアルゴリズムが蓄積される。これが進化の要因である。脳における重要な獲得戦略は学習性である。学習によって情報を処理するためのアルゴリズムを獲得し、それを神経回路の構築と、そこで活動として表現するのである。脳に新たに入力された情報は、すでに獲得した神経回路を活性化する引き金として使われ、これによって脳は出力をを行う。そして出力をすることで学習効果が生じ、アルゴリズムが書き換わるのである。すなわち脳は学習によって自らの内部世界を作り、そこにまず回答テーブルを用意する。入力情報はこの答えを引き出すための検索情報として用いられ、脳からの出力はあらかじめ用意された回答の中から選択され、言動などの出力となるのである。学習性と回答テーブルのおかげで、不完全な入力情報に対しても何らかの適切な対応(「柔らかい情報処理」)が可能なのである。

上記のように近年の脳科学の成果による

と、人間はアブダクションを行っているのである。このアブダクションとアナロジー（「過去の類似した経験を現在の問題状況に適用するためのメカニズムであって、知識が不十分でも、柔軟な思考を行うことを可能にする。」（西部、P41））を CR では重要な意味を持つ推論と考えている。西部はアブダクションやアナロジーの積極的な意義を理解することによって、経験主義・実証主義的な科学観を是正したコールドウェルの方法論的多元主義(MP)をも乗り越えることができるとして述べている。アナロジーは非現実的実在へのヴィジョンをターゲットとして設定し、準抽象化を媒介にして異なる理論間の諸概念・モデルのベースを検索し、そこから必要な概念やモデルを転移・配合・変形する。このような推論は常に正しいとは限らないが、新たな理論を生み出すための多様性の源泉となる可能性は排除できない。その意味で、MP における研究プログラム創発問題を乗り越えており、また諸学派の並存ではなく共進化の可能性を述べている点で、新たな科学観であるように思われる。西部はこれを「進化的多元主義」、「アナロジー的多元主義」（西部、P46）と呼んでいるのである。

### 3. 研究手法としてのシミュレーション

EEにおいては、対象の理解・分析にシミュレーションが多く用いられている。それはモデルが自由度の高い動的な多対多関係、つまり非還元主義的、非線形的な複雑系を扱っているため、解析的手法が困難か、もしくは不可能であるからである。しかしシミュレーションは現実を正確に模倣、再現し、将来を予測するために行われているの

ではない。「研究者が現実の経済の観察や経験からアブダクションやアナロジーを通じて理解した経済の本質的な特性、すなわち経験的実在の背後にあると考える非現実的実在を固有のパターンや秩序の再現によってコンピューター上に人工的に構成すること」（西部、P49）、すなわち現象を「説明」するためにおこなわれている。吉田も MAS を用いる理由として、「実動作しうるシステムモデルを作り、われわれの経済システムの理解の基礎としたい」（吉田、P260）と述べている。ゆえに我々は、設計者の用いたアナロジーが本質を突いているかいないかの吟味をシミュレーション結果からするのである。

吉田は「経済学の歴史の見方にも深くかかわるものである」（吉田、P260）と、学説史研究において研究射程を広げる可能性が MAE にはあると述べる。現在の学説史研究は「のちに整理された NC につながるもののが探索に傾きがち」であるが、「もっと経済学に対して積極的な活動としてとらえるならば、現在の経済学の思考とは独立に過去の経済学著作や資料に対峙し、その構造的読解を試み、現在の経済学の思考に対してそこから得られたものをぶつけなおす活動」（共に吉田、P261）と捉えなおすべきである。そして MAE はその際の構造表現の支援となりえるのである。

ケインズの名を冠したマクロ経済学は、NC の基礎の上に置かれ埋没しつつある。吉田はこの状況を例に挙げ、「埋没してその理論像がわからなくなっている現状であれば、『ケインズの飛躍』という問題設定から考え直さなければならない」、しかし「『貨幣論』が古典派の世界か」というと、これま

大首を絞らざるゑない」(吉田, P262)と述べている。つまりスタートとゴールと共に欠いているため「ケインズ革命」のメッセージが失われており、現在のマクロ経済学に理論的な発言権を持ちうることができてはいないのである。理論研究者がケインズの「言ったこと」(残されているケインズの全言辞)のごく一部を抽出して理論構築をするのに対し、学説史家がそれを認めないのであれば、学説史家が認めても良いケインズの「やっていること」(「論じる変数が明確に定義され、それが体系内で求められるよう経済社会モデルが明確に定義されるか、明確な定義につながる十分な議論がおこなわれていなければならない」を満たすもの)(吉田, P261))を理論研究者に示さなければならない。その「やっていること」の選択は研究者の理論的視点(ヴィジョン)によって影響を受ける。ならば学説史家は「学説史認定率(=やっていること÷言つ

ていること)」(吉田, P263)を提示すべきであると吉田は述べる。

吉田はケインズの「言っていること」と「やっていること」の相違に着目し、ケインズの「やっていること」(構造的読解)を理解・説明(構造表現)するには、MAEでの表現が有効であると考え、確実な資料処理からいくつかの見通しを立てた。それによつて『一般理論』では背後に隠れてしまった再生産システムにおける、各群(消費財生産企業家群、資産家群等)の調整行動がどのように行われているかといった「内部のホワイトボックス化(ミクロ的基礎での相互作用)」に努めている。吉田の作業は学説史研究が経済思想に対して有効に発言するための一つの方法として有用であることは間違いないところである。ゆえに現在の経済思想の潮流に、何らかの影響力をもたらす可能性を秘めたものであろう。

### EIER 書評会

7月23日、専修大学神田校舎にて専大社研の共催を得て EIER の最初の2号分についての合評会を行った。10回目の節目の大会となる北海道大会が、これから日本の進化経済学が進む道をその原点に立ち返って見極めるべく、「進化経済学の再定義」というテーマを掲げたこととも呼応して、昨年度より立ち上げた英文誌を個々の論文ごとに評者を立て(部会活動報告を参照)、私たちの学会が世に問うたものがどういうものであったか、私たちの現在地を精しく確認しておこうということでこの合評会は開かれた。

合評会ではまず、塩沢会長より総評、2年経った EIER の目指すところ、Greetings、Manifestoへのコメントが示され、以下個別論文について、石塚良次、鄭裕勲、富澤拓志、松前龍宜、在間敬子、有賀裕二、小山祐介会員により、論点の紹介と論評が行われ、最後に八木副会長より総括と学会のこれからについての展望が行われた。

興味に従った個人的な読みと違い、各評者による詳細で包括的な論点紹介と論評は、学会としての成果を確実に共有していく上で欠かせないものではないだろうか。途中、大きな地震で会議室がしばらく揺れ、ヒヤッとさせられる場面もあったが、懇親会に至るまで活発な議論がなされた。(専修大学 吉田雅明)

\*\*\*\*\*  
**進化経済学会第 III 期第 6 回理事会報告**

1. 2005 年 9 月 10 日（土曜）12 時 40 分から、北海道大学ファカルティハウス「えんれいそう」会議室において、第 III 期第 6 回理事会が開催された。

出席：会長、副会長、13 理事、2 監査委員、15 委任理事。

2. 八木副会長が会員状況について報告した。10 会員が意思を表明して退会したほか、前年度末（2005 年 3 月末）で 4 年間会費未納であった 31 名の会員を、会則第 8 条を適用して除籍した。

3. 入会申込者 15 名について入会資格あるものとし、本年度からの会員として扱うと決定した。これで会員数は、個人会員 501 名、賛助会員 1 団体、招待会員 2 名、計 504 会員となる。

入会者氏名：住沢博紀、青木健、神戸基好、橋本努、小林大州介、西洋、草郷孝好、後藤玲子、岩崎葉子、松前龍宜、鄭裕勲、

田口雅弘、藤本隆宏、内橋賢悟、栗田寛之  
4. 富森、谷口両監査委員の署名の入った平成 16 年度の決算報告書が示され、両監査委員の監査報告を了承した。それに続いて、澤邊常任理事から平成 17 年度半ばの会計状況について説明があった。

5. 6 月 18 日開催の常任理事会にもとづいて、塩沢会長が第 IV 期役員選挙の会長、副会長、および推薦理事の候補について提案をおこない承認された。今回の理事会での資格審査による入会者も選挙・被選挙権を有する者とし、休会者は権利を有さない者として会員名簿を作成し、選挙のために

配布することとした。長尾選挙管理委員長から、選挙管理委員を 1 名（西本和己会員）追加し、会員名簿などの準備を整えて選挙を 10 月に実施するという実施方針が示された。なお、今回の選挙は現行の「役員選挙細則」どおりにおこなうが、この方式で適當かどうか、とくに年齢その他でバランスのとれた役員構成にするにはどうしたらいいか、選挙細則改正の可能性も含めて次期の理事会で検討するよう申し送ることとした。（役員候補者については、選挙管理委員会から会員に通知される。）

6. 西部大会実行委員長から、第 10 回札幌大会の準備状況について説明された。なお、今回理事会の直前に開催されたサマースクールに 40 名以上の参加があったことが合わせて報告された。また、第 11 回大会は、京都大学で開催することを決定した。

7. 八木英文誌編集委員長から、英文誌 EIER の刊行および編集状況について説明があった。この雑誌は、J-STAGE でオンライン公開され、またアブストラクトが JEL および Econ-Lit に採録されることになっている。また、塩沢会長から、『進化経済学ハンドブック』の編集状況について説明および協力要請があった。

8. 現行の「会則」は、創立時の特別措置についての附則がついているが、会計年度についての記載がないという不備があることが指摘された。改正案を作成して、次回の会員総会に提案する。選挙の仕方についての検討で「細則」および「会則」の改正

が必要になるかもしれないが、それについては来年度の新理事会で検討する。

#### 9. 有賀常任理事から、経済学会連合の評

議員会についての報告があった。

10. 部会報告は、ニュースレターでおこなう。以上 (文責: 八木紀一郎)

### 第 III 期第 5 回理事会以降の入退会者

#### 〈退会者〉

\*林 堅太郎  
\*加地 直樹  
\*松本 有一  
\*佐久間 美明  
\*車谷 浩一  
\*斎藤 了文  
内田 弘  
村田 晴夫  
川越 修  
武田 哲夫  
吉野 章  
森 馨一郎

佐藤 直恵

古江 晋也

川本 信太郎

ケネス・ペクター

足立 真理子

荒木孝治

浅田 彰

グラシエ・クビカ

黙田 井正

藤原 秀夫

井口 貢

池本 幸生

加護野 忠男

菊池 光造

的場 信樹

松本 昭夫

大野 節夫

関野 満夫

高松 亨

高山 史乃

玉井 義浩

田中 辰雄

谷口 和弘

内田 交謹

八木 直人

柳田 香織

柳原 透

横尾 昌紀

筆宝 康之

国枝 卓真

黒木 龍三

宋 磬

喜志麻 孝子

洪 興子

朴 智瑛

(\*年度末退会者)

#### 〈入会者〉

住沢 博紀 (日本女子大学家政学部)

青木 健 (京都大学大学院博士後期課程)

神戸 基好 (兵庫県立大学大学院経済学研究科博士後期課程)

橋本 努 (北海道大学大学院経済学研究科)

小林 大州介 (北海道大学経済学研究科博士後期課程)

西 洋 (九州大学大学院経済学府博士後期課程)

草郷 孝好 (大阪大学大学院人間科学研究科)

後藤 玲子 (茨城大学人文学部社会学科)

岩崎 葵子 (アジア経済研究所地域研究センター・中東研究グループ)

松前 龍宜 (東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻博士後期課程)

鄭 裕勲 (京都大学大学院博士後期課程・経済学研究科)

田口雅弘 (岡山大学経済学部)

藤本隆宏 (東京大学大学院経済学研究科)

内橋賢悟 (流通科学大学)

栗田寛之 (横浜国立大学大学院博士後期課程・国際社会科学研究)

## 2005年度進化経済学会役員選挙報告

### 2005年度進化経済学会役員選挙報告

10月に実施された役員選挙の結果、会長、副会長、理事に下記の方々が当選されましたので、報告いたします。

#### 進化経済学会選挙管理委員会

委員長 長尾 伸一  
鍋島 直樹  
西本 和見

#### \*\*\*\*\* 2005年度進化経済学会役員選挙 当選者名簿

会長 八木 紀一郎

副会長 吉田 和男

#### 理事

浅田 統一郎

江頭 進

瀬地山 敏

萩原 泰治

荒川 草義

岡村 東洋光

高安 秀樹

平野 泰朗

有賀 裕二

海藏寺 大成

谷口 和久

藤本 隆宏

磯谷 明徳

金子 勝

丹沢 安治

宮本 光晴

依田 高典

澤邊 紀生

出口 弘

山田 銳夫

植村 博恭

塩沢 由典

長尾 伸一

吉田 雅明

宇仁 宏幸

清水 耕一

鍋島 直樹

若森 章孝

須藤 修

西部 忠

\*\*\*\*\*

進化経済学会  
平成16年度 収支計算書決算報告  
(平成16年4月1日～平成17年3月31日)

(単位:円)

収入	予算額	決算額	増減	支出	予算額	決算額	増減
会費	5,085,000			大会費	1,600,000	1,596,728	96,728
正会員該当年度	4,500,000	2,900,000	▲ 865,000	理事会運営費		34,650	34,650
正会員過年度分		1,015,000	▲ 865,000	出版費	1,300,000	0	▲ 1,300,000
院生会員該当年度	455,000	260,000	▲ 105,000	英文誌編集刊行費	1,600,000	881,475	▲ 618,525
院生会員過年度分		80,000	▲ 105,000	通信費	200,000	329,880	129,880
賛助会員該当年度	50,000	50,000		交通費	400,000	155,710	▲ 244,290
利息		3		事務用品費	30,000	110,745	80,745
寄付金		30,000		謝金	100,000	40,000	▲ 60,000
備品売却代	300,000	159,000	▲ 141,000	送金手数料	40,000	8,487	▲ 31,513
雑収入		4		会員費	100,000	12,348	▲ 87,652
				印刷費	250,000	180,800	▲ 69,400
				事務委託費	400,000	375,218	▲ 24,781
				国際交流費	100,000	50,000	▲ 50,000
				部会補助費	250,000	200,000	▲ 50,000
				経済学会運営	35,000	0	▲ 35,000
当期収入合計	5,385,000	4,504,007			6,205,000	3,975,842	▲ 2,229,158
前年度越金	4,000,000	4,634,080			3,130,000	5,162,245	1,982,245
総計	9,385,000	9,138,087			9,385,000	9,138,087	▲ 246,913

## 項目ごとの内訳

印刷費	
ニュースレターNO.16	90,300
ニュースレターNO.17	90,300
	180,600

事務用品費	
請求書封筒代印刷代	52,208
学会誌発送用封筒作成代	58,537
	110,745

会議費(理事会費等含む)	
理事会委員会	12,348
	12,348

謝金	
HP維持費	40,000
	40,000

大会費用	
オータムコンファレンス	160,863
本大会	1,435,865
	1,596,728

雑収入	
大会賛助	4
	4

借方	
I. 流動資産	
現金	
預金	
普通預金	527,793
郵便貯金	0
郵便振替	4,847,335
預け金(大会補助金小山先生)	7,117
	III. 正味財産
合計	5,182,245 合計

財産目録		
(平成17年3月31日現在)		
(資産の部)		
科目	管理部門	金額
流動資産		
現金		
預金	学会事務局(御蔵文部) 三井住友銀行 学会事務局(國際文部) 郵便振替	
預け金	小山先生(大会補助金)	
資産合計		

(負債及び正味財産の部)		
科目	適用	金額
流動負債		
前受会費	平成17年度以降会費	
未払金		
負債合計		
正味財産合計		
資産合計		

上記の通り相違ないことを確認しました。

平成17年8月28日

進化経済学会監査委員

宮森彦

平成17年8月31日

進化経済学会監査委員

谷口和

\*\*\*\*\*

## 2005年度上期部会活動

\*\*\*\*\*

### 非線形問題研究部会

進化経済学会非線形問題研究部会活動は、  
<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~aruka/activities.html>  
でも案内しています。

#### 研究会セミナーの開催

##### 非線形問題研究部会 2005 年度 No.1

中央大学企業研究所共催

日時 2005 年 5 月 31 日（土）15-17 時

場所 中央大学多摩キャンパス 2 号館 4 階  
研究所会議室

講師 澤邊紀生氏（京都大学大学院経済学研究科助教授）

論題 管理会計技法の進化と制度的環境---東京三菱銀行の BSC と金融規制の事例---

#### シンポジウムの開催

##### 進化経済学のこれから

- E I E R 合評会をかねて

専修大学社会科学研究所共催

日時 2005 年 7 月 23 日（土）13-17 時 30 分

場所 専修大学神田校舎 1 号館 13 A 会議室

1. EIER の目指すところ 寄せられた Greeting、Manifesto について 塩沢由典（大阪市大）

2. EIER 1・2 号掲載論文の紹介と論評

(1) Adam Smith and Competitive Equilibrium  
(R.Chandra) 評者：石塚良次（専修大学）

(2) Bottleneck Monopolies and Network Externalities in Network Industries (T.Ida)  
評者：鄭裕勲（京都大学・院）

(3) Management Model for Technological Change and Substainable Growth (S.Sakaki)  
評者：富澤拓志（産業技術総合研究所）

(4) Population Thinking, Price's Equation and the Analysis of Economic Evolution  
(E.S.Andersen) 評者：松前龍宜（東工大・院）

(5) Why Is Environmental Policy Not Market-Based? (T.Oka) 評者：在間敬子（専修大学）

(6) A Study on the Consistency between Empirical Studies and Growth Models with Demand Satiation and Structural Change  
(T.Matsumae) 評者：有賀裕二（中央大学）

(7) Some Comments on the Methodological Principles of Nelson and Winter's Evolutionary Theory (P.Eparvier) 評者：小山祐介（東工大）

3. EIER の今後の予定、日本の進化経済学のこれから 八木紀一郎（京都大学）  
なお、下期には、経済物理などのセミナーを開催予定。  
(文責：有賀裕二)

### 九州部会

第 34 回研究会（九産大経済学会との共催）

日時 2005 年 7 月 9 日（土）

会場 九州産業大学 1 号館 7 階中会議室

13 時 30 分～14 時 50 分

岡本哲史（九産大） 「ラテン・アメリカが警告するもの —チリの事例を中心に—」	13時30分～15時20分
島浩二（非会員：阪南大） 「イギリス住宅改良運動における相互扶助と 慈善」	
15時00分～17時00分	
ロベール・ボワイエ（仏：EHESS 研究部長他） 「How and Why Capitalism Differ?」	15時40分～17時30分
高田実（非会員：九州国際大） 「近代イギリスにおける相互扶助とフィラン スロピー～国際比較の観点から～」	
第35回研究会 (フィランスロピー研究会との合同開催)	
日時 2005年8月6日（土）13:30～17:30	
会場 九州産業大学1号館9階小会議室	（文責：岡村東洋光）

## 現代日本の経済制度研究部会

第21回研究会 (京都大学COEセミナーとの共催)	報告：山田銳夫著「日本資本主義へのレギュラシオン・アプローチ——論点の整理」（『季刊 経済理論』第42号第2巻）の合評会
日時：7月23日（土） 15:00～17:00	評者 藤田真哉氏（京都大学大学院） 横田宏樹氏（名古屋大学大学院）
場所：京大会館215号室	第2回研究会
報告：R.ボワイエ（フランスCNRS） “The institutional complementarity hypothesis.” Background paper: “Coherence, Diversity and Evolution of Capitalism: the institutional complementarity hypothesis”, May 2005.	日時：9月17日（土） 13:30～17:00
他に、部会有志による「90年代日本の 経済体制」研究会が以下の活動を行う。	場所：名古屋大学経済学部 演習室
第1回研究会 日時：7月23日（土） 10:00～12:00	報告1：宇仁宏幸（京都大学） 「90年代日本と米国の構造変化と資本蓄積」
場所：京都大学大学院経済学研究科 総合研究棟 1階 101演習室	報告2：遠山弘徳（静岡大学） 「諸制度の補完性、資本主義の多様性および マクロ経済パフォーマンス」 (文責：平野泰朗)

## 制度とイノベーションの経済学部会

2005年5月14日（土）午後2～5時 河合塾京都校	ムズ館2階J202号室 横田宏樹（名古屋大学・院）
磯谷明徳著『制度経済学のフロンティア』 ミネルヴァ書房 書評会	「レギュラシオン理論の企業論に向けて—資本主義における国民的モデルと企業モデルの 間で—」
書評者：宇仁宏幸（京都大学） 徳丸宜穂（名古屋商科大学）	Robert Boyer (CEPREMAP), Multilevel governance and institutional reform in Europe: the example of the stability and growth pact. (文責：八木紀一郎)
2005年7月16日（土）午後2時～5時 (京大COEと共に)	
同志社女子大学 今出川キャンパス ジェー	

## 「**英文誌編集委員会から**」

*Evolutionary and Institutional Economics Review* の第2巻第1号が刊行され、11月中にお手元に届くはずです。西部忠・植村博恭両編集委員の担当で以下のように「制度および進化の社会経済学」の特集号としました。

### CONTENTS of Vol.2, no.1

Makoto NISHIBE and Hiroyasu UEMURA, "The Socio-economics of Institutions and Evolution"

Tony LAWSON, "The Nature of Institutional Economics"

Samuel BOWLES and Herbert GINTIS, "Can Self-Interest Explain Cooperation?"

Robert BOYER, "Coherence, Diversity, and the Evolution of Capitalisms – The Institutional Complementarity Hypothesis"

Carlos M. PARRA, "Rules and Knowledge"

Bernard LIETAER and Stefan BRUNNHUBER, "Economics as an Evolutionary System - Psychological Development and Economic Behavior"

第2巻第2号は「社会および経済物理学」の特集で、今年度中に刊行します。

EIER は科学技術振興機構の電子ジャーナル公開システム（J-STAGE）で公開しています。

<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/eier/-char/ja/> をご覧ください。また、Journal of Economic Literature, EconLitへのタイトルおよびアブストラクトの採録も決定しました。

第3巻では合理性の問題をとりあげたいと思っています。それに関連していても、していないくとも、会員のみなさまからの投稿を歓迎します。論文(10,000語以内)だけでなく、ノート(3000語以内)では、研究成果の摘要、資料、提案、批評などを含めて投稿を受け付けます。投稿受付後3ヶ月以内に採否をお伝えします。

所属大学その他図書室などの予約購入を働きかけてくださるようお願いします。1年1巻(2号)で国内7000円、国外60USDです(郵送料込み)。第1巻に通ってのご注文も可能です。国際文献印刷社内の進化経済学会事務局にお申し込みください。会員には無料配布されますが、会員で追加購入やバックナンバー入手されたい方には、1冊1500円、1巻3000円で頒布します。

## 「**その他のお知らせ**」

\*『進化経済学ハンドブック』は、来年のオータムコンファレンス(2006年9月23日)をめどに共立出版から刊行の予定です。

\*2006年度の第11回大会開催校は京都大学です。オータムコンファレンスを2006年の9月23日(進化経済学ユース・ワークショップを前日の22日)、大会を2007年3月24-25日に開催する予定です。

\*\*\*\*\*  
**第10回進化経済学会北海道（北海道大学）大会のご案内**

\*\*\*\*\*  
節目の第十回を迎える北海道大会でお待ちしております。

**開催日時：** 2006年3月25日(土) - 26日(日)

**開催場所：** 北海道大学人文社会科学総合教育研究棟（通称W棟）

**テーマ：** 進化経済学の再定義－学の分岐と融合

ホームページアドレス：

<http://jea.ega-s.otaru-uc.ac.jp/evoecohokkaido/hokkaidobranch/10thmeeting.html>

連絡先アドレス：

kichiji@topology.coe.hokudai.ac.jp

進化経済学会10年の歴史の中で様々な学の分岐と融合が生じてきました。そこで記念すべき進化経済学会第10回大会という節目を期にもう一度、原点に戻り、進化経済学の方法論・手法上の特徴、独自な理論的意義や政策的課題、他のアプローチとの異同、進化論の適用等について経済学、経済学史、経営学等の視点だけでなく、自然科学の視点を含めた検討作業が必要であるという問題関心から「進化経済学の再定義」というテーマを採択しました。進化経済学会会員の皆様の多様な議論を期待しております。

**第10回進化経済学会北海道（北海道大学）大会運営委員会**

委員長・西部忠（北海道大学大学院経済学研究科:nishibe@econ.hokudai.ac.jp）/副委員長

・岡部洋實（北海道大学大学院経済学研究科:hiro@econ.hokudai.ac.jp）/副委員長・

江頭進（小樽商科大学経済学科:egashira@res.otaru-uc.ac.jp）/事務局長・吉地望（北

海道大学大学院工学研究科:kichiji@topology.coe.hokudai.ac.jp）

「北海道大会運営委員会からお知らせ」

本学会において実績のあるポスターセッションを希望される方は、大会ホームページからの申し込みフォームをご利用ください。大会ホームページからの申し込みが出来ない場合には、大会連絡先アドレスにお問い合わせ下さい。ポスターセッションの〆切は1月21日なっておりますが、早めにお申し込みください。